特集

災害と図書館

イラク戦争と図書館

小林 磨理恵

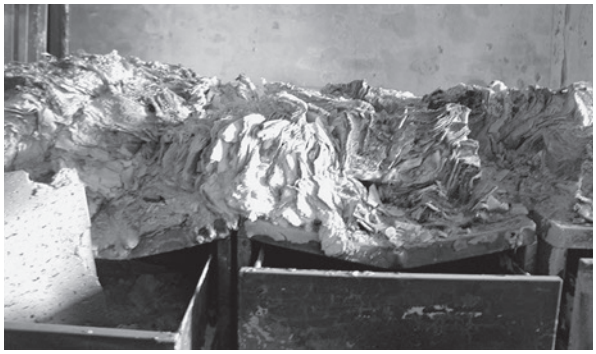
二〇〇三年三月二〇日、米英軍の侵攻により、イラク戦争が始まった。五月一日にブッシュ大統領より戦闘終結宣言が発せられたが、その後も戦闘状態は続き、事態は泥沼の様相を呈した。米軍の撤退が完了したのは二〇一一年一二月のことであり、記憶に新しい。二〇一三年三月には開戦から一〇年目を迎えるが、開戦時の強い印象はその後の社会変容のなかで薄れつつある。戦争が図書館にもたらした影響について、今一度考えたい。

●図書館等の被害状況

ことに紛争・戦争という人為的災害の状況下では美術品や文化財の略奪が絶えない。また、戦禍に紛れて重要文書を意図的に廃棄する動きもある。イラクでも例に漏れず、美術品や文化財の略奪や盗難が相次いだと報告された。図書館の被害状況を中心にみてみよう。

①イラク国立図書館・文書館

防衛省の真向かいに位置するイラク国立図書館・文書館（一九二〇年創立）は、二〇〇三年四月に二度の略奪と火災に遭い、建物、蔵書ともに甚大な害を被った。蔵書の約二五％が略奪されたという。とりわけ焼失の被害が大きかったのは、歴史的価値の高い文書やマイクロフィルムである。この点について同年一〇～一一月に調査を実施したアメリカ議会図書館の調査団は、無作為な略奪ではなく、発火装置を用いた組織的な犯行によるものであろうとの見解を示している。一方で、蔵書の一部は司書によって事前に安全な場所に移されており、難を逃れた。また、司書が書架をさえぎる金属製のドアを閉めたことで守られた蔵書もあった。アメリカ議会図書館の調査団来訪時にこのドアは開けられ、そのなかの安全が確認されている。



焼かれた国立図書館の文書（McGuire Gibson氏撮影、http://oi.uchicago.edu/OI/IRAQ/mela/LibraryPix/08.html：2013/1/21最終閲覧）

②大学図書館

大学図書館の被害状況は図書館によって様々である。バグダット大学は二つのキャンパスを擁するが、そのひとつ、バーブ・アル・ムアッザムキャンパスのアルワジーリーヤ中央図書館では蔵書の多くは守られたものの、略奪と放火に遭った。一方で、もうひとつのアル・ジャディーリーヤキャンパス中央図書館では窓ガラス、ドア、コンピュータが失われたのみに止まった。イラク北部にあるモスル大学中央図書館では、放火はされなかったが、備品や蔵書の略奪に遭った。

壊滅的な害を被ったのは、イラク南東部に位置するバスラの大



放火された宗教関係中央図書館（Nabil al-Tikriti氏撮影、http://oi.uchicago.edu/OI/IRAQ/mela/LibraryPix/036.html：2013/1/21最終閲覧）

学図書館や公共図書館である。イラン・イラク戦争による荒廃から一部しか復旧していなかったバスラ大学の図書館は略奪の嵐に遭い、放火された。

③他の施設

最も古くから写本コレクションを所蔵する宗教関係中央図書館（Maktabat al-Awqāf al-Markaziyyah）の建物もまた、火災に遭った。しかし火災が起こる前に、コーランの重要なコレクションを含む大部分の写本は別の場所に移され、武装衛兵の管理下に置かれたため難を逃れた。一方、トラックに積まれ、また別の場所に移された一部の写本は、略奪、あるいは放火され、失われてしまった。写本を守っていた武装衛兵が米軍に殺害されたり、武装解除されたりしたため、図書館へ写本を戻そうとトラックの移動を試みた矢先の出来事だったという。


荒らされた知恵の館の図書（Nabil al-Tikriti氏撮影、http://oi.uchicago.edu/OI/IRAQ/mela/LibraryPix/012.html：2013/1/21最終閲覧）

知恵の館（Bayt Al-Hikma）は、図書館、講義室、音楽ホール、コンピュータ室を備える芸術と人文科学の研究支援センターであるが、ここでも多くの蔵書や備品が略奪され、放火に遭った。失われた一〇〇の写本には、九世紀のコーランなど重要なものが含まれていたという。

イラク科学アカデミー（al-Majma'a al-'Ilmī al-'Irāqī）も略奪に遭い、全てのコンピュータ、エアコンなどの電気機器や備品が失われた。しかし幸いにも放火はされず、また、多くの蔵書が略奪されなかった。この点について、同機関を調査したシカゴ大学のナビル・アル・ティクリティは「この略奪は他で起こったような組織的な犯行ではないことを示唆する」と指摘している。

このように、多くの図書館や文書館が戦時下で悲劇的な状況に置かれた。略奪・放火の目的は、金銭目当ての強盗と、政治的な資料の廃棄・略奪とに大別されると考えられる。前者の場合、散発的な盗みに止まり、放火はされないケースもあるが、一方で後者の場合は、とりわけ集中的な放火があり、組織的な犯行によるものとみられている。国立図書館の歴史文書被害がその一例だろう。戦争は、現在を奪うことはもとより、過去の営みをも消し去る行為を誘発し、全てを無にしてしまう。

●戦禍における司書の行動

司書らの尽力により、戦時下で難を逃れた資料もあった。『バスラの図書館員：イラクで本当にあった話』という一冊の絵本がある。ここには、戦火にのまれたバスラの図書館の蔵書三万冊を、仲間と共に自宅へ運ぶことで守ろうとしたある女性の実話が描かれている。

同様のことは他にもあった。イラク写本館（Dār al-Makhtūtāt al-'Irāqīyyah）が所蔵するイラク最大の写本コレクションは、スタッフの計画的行動が功を奏し、完全な状態で守られたという。その計画は米軍の侵攻より四カ月も前に開始されていた。七八三台のトラックに積まれた約五万の写本や貴重書は、米軍の侵攻前に無事に防空施設に移された。その結果、開戦後に写本館に侵入した強盗は、コンピュータ、マイクロフィルム読取機、保存室の器具を盗みとるに止まった。また、写本を保管した防空施設は米軍の攻撃のターゲットにならなかった。

二〇〇三年四月末に米軍によって写本を積んだトラックは国立博物館に移動され、それ以降アメリカの保護下に置かれた。このとき欧米のメディアは、防空施設で写本が「発見された」と報じたが、その背景には貴重な資料を是が非でも守ろうとした人々の努力があったのである。

他方、国立図書館・文書館の復興に尽力した人物として有名なサアド・エスカンダー館長は、二〇〇六年一一月から二〇〇七年七月

までの間、ウェブ日記を発信し続けた。開戦から三年以上経過してもなお続く銃撃戦や自爆テロ、図書館復興の妨げとなる停電やインターネットの不通…。少なからぬ司書やその家族もまた、殺害されたり、誘拐されたり、傷つけられたりしたことを告白している。館長は日記によって、同僚、特に命を失った人々の悲劇を食い物にすることに罪の意識を感じると記し、二〇〇七年七月に日記を終えたが、死と隣り合わせの図書館の日常風景は、世界の読者に衝撃を与え、泥沼化した「戦後」に再考を促す効果を持ったといえよう。

●復興に向けて

図書館の復興に向けて多様な取り組みがイラク国内外で行われている。そのひとつに中東司書協会(Middle East Librarians Association)の活動がある。中東司書協会は、イラクの図書館復興を促進するための委員会を組織した。二〇一一年の年報には、イラクヴァーチャル科学図書館の状況、イラクの学術図書館の歴史と現在を文書化する新たな試み、イラク国立図書館・文書館の状況、略奪された文書の状態などが記されている。

年報によれば、イラクヴァーチャル科学図書館は、科学雑誌や工学雑誌に掲載された論文にオンラインでアクセスできる電子図書館であり、高等教育の促進のために開設された。イラクの大学や研究機関に所属する学生や研究者が利用可能である。利用登録者数や論文ダウンロード数は順調に伸びており、研究インフラとしての発展が期待される。一方で、アメリカ国内にあるとされる略奪された記録・文書の返還交渉は暗礁に乗り上げている。イラク政府、外務省があらゆる記録・文書の確実な返還を呼びかけているが、アメリカ側が取り合わないという。国立図書館・文書館のエスカンダー館長は、文書の返還問題が、単にアメリカの一機関とイラク国立図書館・文書館との間の問題ではなく、イラク＝アメリカ間の問題になることをイラクの人々は求め続けているという。また、文書は国家の文化遺産の一部であり、人々の歴史的記憶を具体化したものであるという考えを繰り返し主張し、文書が国立図書館・文書館に戻されるよう働きかけている。

このように、図書館復興に向けた新たな試みが軌道に乗る一方で、失われた過去を取り戻す動きは遅々として進まない。望むことは、資料が本来あるべきところに戻り、現地の司書の手で今後も受け継がれることである。資料の返還は、復興に向けた必須の要件であり、戦争を開始した者の最低限の責務であろう。

(こばやし　まりえ／アジア経済研究所　図書館資料企画課)

《参考文献》

①Jean-Marie Arnoult 2003. "Assessment of Iraqi Cultural Heritage: Libraries & Archives, June 27-July 6, 2003." UNESCO Contract.

②ジャネット・ウィンター、[二〇〇六] 長田弘訳『バスラの図書館員：イラクで本当にあった話』、晶文社。

③Jeffrey B. Spurr 2007. "Iraqi Libraries and Archives in Peril: Survival in a Time of Invasion, Chaos, and Civil Conflict, A Report." (http://oi.uchicago.edu/OI/IRAQ/mela/update_2007.htm : 2013/1/21最終閲覧).

④Mary-Jane Deeb, et al, 2003. "Library of Congress and the U.S. Department of State Mission to Baghdad. Report on the National Library and the House of Manuscripts, October 27-November 3, 2003." (http://www.loc.gov/rr/amed/iraqreport/iraqreport.html : 2013/1/21最終閲覧).

⑤MELA Committee on Iraqi Libraries 2011. "Report," Washington, D.C., 30 November 2011, Middle East Librarians Association.

⑥Nabil Al-Tikriti 2007. ""Stuff Happens": A Brief Overview of the 2003 Destruction of Iraqi Manuscript Collections, Archives, and Libraries," Library Trends 55(3), pp. 730-745.

⑦"Saad Eskander's Iraq Diary" (http://www.webarchive.org.uk/wayback/archive/20100427123118/http://www.bl.uk/iraqdiary.html : 2013/1/21最終閲覧).